

# きたネット、全道交流会を振り返る。

「顔と顔の見えるネットワークづくり」をスローガンに、  
2003年に始まった北海道市民環境ネットワーク全道交流会。  
過去3年間の報告書も完成しました。

第1回  
下川町

他の都道府県に比べ、エリアが広大な北海道。さまざまなメディアを通じて、互いの活動の概要は知っていても、互いに顔を合わすこともままならない道内の活動団体。この交流会は団体同士が顔と顔を合わせ、直に語り合うことで生まれる絆を大切にしたいとスタートしました。

第1回(2003年・下川町)、第2回(2004年・帯広市)、第3回(2005年・札幌市)で開催。交流会をきっかけに、深まった互いの活動への理解、広まった交流の輪もあります。

そして今年は道東の美幌町を舞台に、7月15日・16日に開催します。恒例の講演会は、ホテルの生態研究で名高い、大場信義氏にお願いをしました。現地・美幌町ならではの動植物の生態を探る、自然観察会も予定しています。

今後も顔と顔が見えることを大切にしながら、緩やかなネットワークづくりを進め、それぞれが学びあい支え合い、実り多い活動を展開するきっかけとなる場を目指しています。



第2回  
帯広市



第3回  
札幌市



「全道交流会報告書」をさしあげます。

2003下川町、2004帯広市、2005札幌市における講演録、交流と学びあいを記録しています。

ご希望の方は、希望年度と送付左記を明記し事務局へFAX(011-717-1676)でお申込みください。  
※数に限りがあります。品切れの際はご容赦ください。

## ★第1回全道交流会in下川 豊かな自然を未来に、 連携を目指して。

2003.  
10.25-26



第1回開催地は、町面積の9割が森林という上川管内下川町。講演会はカメラマン・稗田(ひえだ)一俊さんを迎え「川になって想うこと」と題して、河川環境のお話をいただきました。台風や豪雨の被害に始まり、被害を誘発する流木の存在、ダムや河川改修の影響、水中の生命サイクル、いのちに配慮した流域のあり方・治水対策へと話は続きました。「イトウから学ぶ」の項では90センチを超す雌雄ペアの産卵風景をはじめ、鮮やかで迫力のある映像資料を堪能。「ごく当たり前の、命を育む川」が失われゆくことへの警鐘は説得力があるものでした。会場となった下川町民会館では稗田さんと道内在住カメラマン・足立聡さんの写真展も開かれました。

このほか、1日目には下川町森林組合が「FSC森林認証と下川の森づくり」、下川自然を考える会が「天塩川の現状と復元への提言」と題して、地元の森林と河川について報告。2日目は町民の方のガイドでキノコ採り&自然観察会を実施しました。午後からは「きたネットに期待すること」をテーマにディスカッションも行われました。

交流会の席上、清掃活動の実績を持つ『浜辺と海を考える会』と『下川自然を考える会』が全道一斉清掃活動を提案。きたネットが事務局をつとめる『ラブアース・クリーンアップin北海道』の種は、下川町で蒔かれたものでした。

## ★第3回全道交流会in札幌 北海道の自然～ 守るべき存在をどう伝えるか。

2005.  
10.23-24



第3回開催地は180万都市でありながら貴重な自然を有する札幌市。1日目はサッポロファクトリーを会場に、市民活動を経済面で支援する「環境市民活動セミナー」から。イオン、環境再生保全機構、前田一歩園財団、セブン-イレブンみどりの基金の各担当者の方に、制度の仕組み、審査基準などを説明していただきました。参加者にはきたネット編集の日本国内の主要な助成制度一覧表を無料配布しました。

続いてトークセッション「北海道のトラストを考える」。トラスト手法で自然を残す活動を続けている3つのNPO法人に、前田一歩園財団の山本光一さん、トラスト活動の先進地イギリスの事情に詳しいエコ・ネットワーク代表小川巖さん、faura編集長の大橋弘一さんを交え、豊かな自然を残す為に欠かせない広報と、広めたがゆえに荒らされる可能性、地価の地域格差問題などを語り合いました。「北海道の環境活動を語り合おう」と題した参加団体の活動紹介や、パネル展なども開催しました。

2日目は、札幌市でトラスト活動を行っている「NPO法人真駒内・芸術の森緑の回廊基金」の南区の活動地を視察した後、清田区のおくいずみ都市環境林の保全活動を行っている「北の里山の会」の例会に参加しました。森の下草狩り作業に汗を流した後は、料理自慢の同会の「飛鳥鍋」に舌鼓をうち、秋の森での交流のひとつときを楽しみました。